

# 音学シンポジウム 2019 開催にあたって

森勢 将雅<sup>1,2,a)</sup> 塩田 さやか 大石 康智<sup>3</sup> 秋田 祐哉<sup>4</sup>  
木谷 俊介<sup>5</sup> 南條 浩輝<sup>4</sup> 松井 健太郎<sup>6</sup> 吉井 和佳<sup>4</sup>

概要：2013年から開催している音学シンポジウムは本年で7回目の開催を迎える。本稿では「音学シンポジウム 2019」について、実施の主旨や今後の展望について述べる。

## 1. はじめに

「音学シンポジウム」は、音に関するあらゆる学術分野をターゲットとして、シングルトラックによる招待講演とポスター形式による一般講演によって構成される学術イベントである。2013年5月に初めて開催され、本年は7回目の開催となる。本稿では、音学シンポジウムの企画動機・趣旨の振り返りと現在に至るまでの変遷から、本年度のシンポジウムの概要について説明する。その後、本シンポジウムの将来の可能性について述べる。

## 2. これまでの音学シンポジウム

第1回目の音学シンポジウム 2013は、情報処理学会音楽情報科学研究会 (SIGMUS) [1] の20周年記念企画の1つとして企画され、2013年5月11, 12日にお茶の水女子大学で開催された。この企画は、画像処理分野において日本国内で最大規模のシンポジウムである「画像の認識・理解シンポジウム (Meeting on Image Recognition & Understanding: MIRU) にインスパイアされて実現されたものである [2]。これまでの音学シンポジウム全体で踏襲されている基本コンセプトは、

- 音・聴覚・言語に関するあらゆる分野を対象とすること
- シングルトラックによって進行すること

の2点である。大規模な学会では、分野やトピック単位でセッションが区切られ別々の会場でパラレルセッションとして開催される。本シンポジウムでは、あえて様々な分野を束ねてシングルトラックにより進行することにより、

表 1 これまでの音学シンポジウムの変遷

開催年	日時	開催場所	ポスター発表数
2013	5/11-12	お茶の水女子大学	51件
2014	5/24-25	日本大学	66件
2015	5/23-24	電気通信大学	61件
2016	5/21-22	東海大学	37件
2017	6/17-18	お茶の水女子大学	47件
2018	6/16-17	東京大学	53件

分野間での議論・交流をより活性化させようという狙いがある。

表1は、これまでの音学シンポジウムの開催日時、開催場所、ポスター発表件数を示す。各回概ね12件の招待講演・チュートリアル講演が企画されており、ポスター発表件数は延べ300件以上となる。また、音学シンポジウム 2016では「MIRU 連携オーガナイズドセッション」が企画された。これは、MIRUと連携し、音と画像それぞれの研究者が

- (1) 信号処理と逆問題
- (2) 認識と変換
- (3) 応用とインターフェース

からなるトピックについてトークバトルをするものであり、大変盛況であった。

## 3. 本年の音学シンポジウム

本年の音学シンポジウム 2019は、6月22日、23日に京都大学で開催される。これまでの音学シンポジウムは東京近郊での開催であったが、今回初めて関西での開催を企画した。これにより、地理的な条件で参加を敬遠していた新たな参加者の獲得を目指している。2014年の音学シンポジウムより、MUS以外の多様な意見を積極的に取り入れるため、実行委員会を立ち上げ協賛研究会から1, 2名ずつ参画する形式を採用している。2018年より音声言語情報処理研究会 (SLP) [3] が主催研究会に加わり、MUSとSLP

<sup>1</sup> 明治大学  
<sup>2</sup> JST さきがけ  
<sup>3</sup> 日本電信電話 (株)  
<sup>4</sup> 京都大学  
<sup>5</sup> 北陸先端科学技術大学院大学  
<sup>6</sup> 日本放送協会  
a) mmorise@meiji.ac.jp

表 2 音学シンポジウム 2019 実行委員会

委員長	森勢 将雅 (明治大学)
副委員長	塩田 さやか (首都大学東京)
副委員長	大石 康智 (日本電信電話 (株))
委員	秋田 祐哉 (京都大学)
委員	木谷 俊介 (北陸先端科学技術大学院大学)
委員	南條 浩輝 (京都大学)
委員	松井 健太郎 (日本放送協会)
委員	吉井 和佳 (京都大学)

との共催研究会の形式となった。また、以下の研究会（電子情報通信学会／日本音響学会 音声研究会 (SP)、電子情報通信学会 応用音響研究会／日本音響学会 電気音響研究会 (EA)、日本音響学会聴覚研究会 (H)) が協賛研究会となっている。表 2 は、実行委員会のメンバー一覧である。

音学シンポジウムでは、招待講演の理解を促進するため、招待講演とチュートリアル講演を組み合わせることができるような構成にするとともに、チュートリアル講演+招待講演、招待講演のみなど柔軟な対応ができるようにした。本年は、招待講演者として以下 6 名の方々に招待講演をお願いすることとした（発表順、敬称略）。

- 中村 哲 (奈良先端科学技術大学院大学)
- 及川 靖広 (早稲田大学)
- 土屋 健伸 (神奈川大学)
- 小森 智康 (日本放送協会)
- 添田 喜治 (産業技術総合研究所)
- 大浦 圭一郎 (名古屋工業大学/株式会社テクノスピーチ)

チュートリアル講演については、招待講演をより深く理解することを狙い、招待講演者との調整を経て以下 4 名の方々にお願いした（順不同、敬称略）。

- EA: 池田 雄介 (東京電機大学)
- EA: 大沼 隼志 (株式会社フォトロン)
- MUS: 才野 慶二郎 (ヤマハ株式会社)
- H: 矢野 肇 (神戸大学)

本年の特色として、1 件の招待講演に対し 2 件のチュートリアル講演を設定するなど、これまでよりさらに柔軟なセッション構成を認めたことがあげられる。ポスター発表は、申し込み時点で 58 件の申し込みがあり、概ね従来と同程度の件数の申し込みを頂いた。

## 4. これからの展望

これまでの開催を通して、音学シンポジウムは関連分野において高い認知度を有している。本年は初めての東京近郊以外での開催であるため、これまでとの発表者・参加者傾向の違いを分析することで、今後の開催地選定の知見を得ていきたい。チュートリアル・招待講演の組み合わせや講演時間についてもより柔軟にすることで、適切な時間・内容での講演が可能ないようにしていくことも課題である。

現在は、研究会の在り方そのものから議論される時代で

あり、音学シンポジウムについてもより良い姿を模索する必要があるといえる。例えば、本シンポジウムの口頭発表は全て招待で構成されているため、一般講演が全てポスターとなっている。毎年実施しているアンケートにも口頭発表の一般枠についても要望があることから、本シンポジウムに適した口頭発表のスタイルについては検討する必要があるように思われる。

## 5. おわりに

「音学シンポジウム」は今年で 7 回目を迎え、チュートリアル・招待講演を組み合わせた柔軟なスタイルを作るなど、マイナーチェンジを経て現在の形に落ち着いてきた。一方、参加者から音に関するあらゆる分野を銘打っている割に講演やポスターの分野が偏っているという指摘もある。運営委員や主催・共催の分野に偏っていることに対応するため、毎年新たな分野の招待講演者を含めるようにしており、今後も様々な研究分野の人にとって有益な会にできるよう工夫を凝らしていく予定である。

## 参考文献

- [1] 情報処理学会 音楽情報科学研究会 (MUS), <http://www.sigmus.jp/>
- [2] 亀岡弘和, “「音学シンポジウム 2013」開催にあたって,” 情報処理学会研究報告, 2014-MUS-103-1 / 電子情報通信学会技術報告, IEICE-SP2014-1, May 2014.
- [3] 情報処理学会 音声言語情報処理研究会 (SLP), <http://sig-slp.jp/>